
魔王陛下と魔界将軍の小話【短編】

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下と魔界將軍の小話【短編】

【Nコード】

N8465U

【作者名】

ワシワシ

【あらすじ】

勇者が旅立ちをめぐる魔王陛下と魔界將軍の仁義なきやり取り。小話ネタです。

「陛下、ついに勇者が始まりの村をたったそうでございます」

膝をつき、奏上する魔界將軍の周囲には、青白い鬼火が燃えている。黒い甲冑の彼が跪く床は黒い御影石に見えるが、その遙か下方が透けて見え、瞬く星々の上に硝子板を渡しているのであった。

相対する位置に、將軍が頭を垂れるべき存在　魔王たる余が玉座に鎮座する。

その言葉に、余は吟味して頷いた。

「あい分かった。この件、そなたに全権をゆだねる」

あとは任せた、と玉座を立とうとしたら、おまえいつの間に関り込んだという恐ろしいまでの速さで、マントを踏んづけられた。

「どこに行かれます」

目深に被った攻撃的形狀のヘルムの隙間から、びきびきと將軍のこめかみに青筋が走るのが見えてしまった。

正直怖すぎる。

「あーあれだ。あれ！　余はあれするから、あれのために」

「あれとは何だ、この愚王が」

ところで、何故余は臣下にこれほど軽々しい扱いを受けているのか皆目検討がつかぬ。

人界でもこういうのは許されるのか？　もしかして余が世事に疎くて、敬愛する主君のマントを踏みつけて「愚王」と罵ることが、

忠誠の表現手段になっているとかそういうことはあるまいな。いやないだろう。ちょっと余の前衛的な思考でもそれはないわというつつこみが即座に返るレベルのありえなさだ。

「待て。怖い。將軍よ、顔が怖いぞ。余はな、常々自己とは何かという疑問に苛まれていてな。ついにこの瞬間思い立って自己実現を始めようかと」

自分探しの旅に、と皆まで言わせてもらえなかった。
胸ぐらをつかまれた。

「もはやこれまで。物わかりのよい忠実なる臣下、陛下のおんためになりませんな。これからはスパルタで参りますゆえ、お覚悟を」

何を言っているのか、余には分からぬ、と言えない雰囲気である。

「まずは」

將軍は苦み走った顔で提案した。

「勇者の祖国に宣戦布告していただきましょう」

……無理い！！ 何言ってるのこの將軍！？ 通り名は鬼畜將軍で
もはやよいぞ！

「そんなことしたら人間が本気になるではないか！？ 余をマジに討ちにやってくるではないか！？ 余に死ねというのか！？」

「がたがた言わずに死ぬ気でやれえ！！！」

びりびりと魔王の間を揺るがす大音響に、姿なき者どもが怯えて

蜘蛛の子を散らすように逃げまどった。余も一緒にモブのふりをして退場したかった。余は魔王なのであるが、臣下に射殺されそうな目で睨まれた。しかもヘルムの角が刺さりそうだ。人間どもに討たれる前に、臣下に蹂躪される――！

「無理だっ 余には無理だっ 大体、宣戦布告なんぞしたら、余の顔とか声とか知れ渡ってしまうのではないか!? 余のプライバシーはどうなるっ もはや素顔でお忍び人界の旅シリーズなぞでできなくなってしまうのではないか!?」

「そんなシリーズを勝手に決行していたわけだな貴様は」

この俺たちが人間どもと必死に戦う傍らで……と地獄から響く低音が余の耳を侵す。

余は……余の特技は自分の墓穴を掘ることかもしれない。

「待て。落ち着くのだ。余は芸術振興に力を注いでいる。芸術の前に人も魔物もない！ 血も臓物も憎悪もいらぬ――！ ラブ&ピース――！ ゆえに人界において余が布教活動を行うのもまた一つの世界征服の手法なのだ！」

余は熱弁を振るった。

芸術、すなわち、異界の人の手による『お取り寄せ品』。

神々の照覧にも耐えうる数々の作品を余は心から愛してやまぬ――！

「特にDQシリーズは初期のロト三部作が素晴らしい――！ 余は不朽の名作？のエンディングのスタッフロールでもはや涙を禁じえなかった――！ ちなみに、余はリメイク版もすでに極めておるが、あえてFC版を愛しておる――！」

拳を握り、熱き魂の内を共有せんとしたところ、いきなり臣下が

最終奥義を余に向けて放った。

かつと白濁してすら見える闇の本流に、生きた剣である男と女の恐ろしい絶叫が鳴り響く。

「……やはり死なぬ」

無念そうに言い放つ將軍。

「愚か者つ　余でなければ死んでおったわ！！　びびったであろう。本当にびびったであろう！？」

余は、魔王であるゆえ、眷属の攻撃を無効化する。無効化するが、痛いもの痛いので、余は全力で避ける。

殺害不可能（厳密には精神的圧死等可能）と分かっていただろうに、あえて実験に及ぶ將軍、なんて恐ろしい子であろう。

將軍は、剣を握り締めたまま、俯き、本当に心底無念そうであった。

「誠に不本意ながら、眷属故に下克上は不可能な仕様ですゆえ」

臣下にここまで言われる余って一体……

すったもんだの末、余は顔を晒して人間界に宣戦布告した。

別に顔はいいのではないかと最後の抵抗をしたが、逃げ道を塞ぐ形で強行された。

一言言わせてほしい。

背後から魂食らいの剣を余に突きつけ、犯行声明を促す男こそ、真の魔王でよかつと。

育て方を間違えたか。

今度育成ゲームの名作をやろうと余は決意した。

ふたりのプロフィール

魔王陛下 ： 性別女 異界かぶれ。

魔界將軍 ： 性別男 まじめ。一歳

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8465u/>

魔王陛下と魔界将軍の小話【短編】

2011年10月6日10時33分発行